

『捷解新語』と改訂版に見られる日本語の一考察

The Japanese Language According to the Revised and Original
Versions of *Shoukaishingo*竹田 裕姫
Yasuyo TAKEDA

Abstract

“Shoukaishingo” was a Japanese textbook for Joseon missions to Japan, authored by Gang Woo Seong. He was captured by Joseon to Japan by Toyotomi Hideyoshi in Joseon Expedition of Bunroku no eki.

During the Joseon Dynasty era, this textbook was used by Sayogwon. The Joseon was a training school of diplomatic translator. This textbook had been used for dialogue, reciting, handwriting, explanation of nouns, translation, and composition.

This paper considers the background of the publication of this textbook, and also compares the original “shoukaishingo” with revised versions (“Kaishuu Shoukaishingo”), and investigates the vicissitudes of Japan.

Keywords : Joseon Dynasty Age, Gang Woo Seong, Sayogwon, Joseon missions to Japan

キーワード : 李氏朝鮮時代、康遇聖、司訳院、朝鮮通信使

はじめに

『捷解新語』は李氏朝鮮時代、1670年から1770年頃に、司訳院と呼ばれる、外交事務に必要な通訳官養成機関で使用されていた日本語学習のための教科書である。『捷解新語』は新しい言語を速やかに習得するための書物という意味だが、『捷』は速く・速いという意味があり、『解』は問題を解く、理解するという意味である。『新語』が日本語を指すことは本書の内容から推測することができる。

『捷解新語』の筆者は康遇聖である。朝鮮人である康遇聖がどのように日本語を習得し、『捷解新語』ではどのような日本語の特徴があるのか。『捷解新語』にみられる日本語の特徴と、改訂版における日本語を考察する。

1. 康遇聖の生い立ち

康遇聖を調べるにあたって、『訳化榜目』⁽¹⁾に記されている康遇聖をめぐる記述を引用する。

康遇聖 万曆己酉増広 字□□ 辛巳生 本晋州 倭学教誨嘉義 父籌教授有慶

これによると、康遇聖が生まれたのは「己酉増広」、西暦に直すと1581年になる。故郷は、韓国の慶尚南道、晋州であることがわかる。1592年、秀吉は第一次晋州攻略で晋州城を攻略した。その時、康遇聖は11歳であった。

ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスの『日本史』⁽²⁾によると

この遠征で・・・(省略) 朝鮮人の死者については知り得なかったが、死者と捕虜を含め、(その数は)日本人のそれとは比較にならぬほど厩犬であった。なぜならば、都その他の地方に連れていかれた者を除き、この下にいる(朝鮮人)捕虜の数は、数えきれぬほど多いからである。

と述べている。このことから、康遇聖は11歳の時の第一次晋州攻略で日本へ捕虜として連れてこられたと考えられる。

再び朝鮮へ帰還できたのは1601年6月、20歳の時である。日本にいた約9年の間、康遇聖の居場所を特定することは難しいが、朝鮮通信使がつけていた日記にておおよそ確認することができる。『海游録』⁽³⁾では、

十一日・・・(省略) 倭言淀江之岸有名晋州島者乃壬辰獲晋州人而処之今其一村無他種・・・
(省略)

ここから明確になることは、文禄壬申の年に晋州で捕虜になった人々が淀川の岸あたりに住まわせられていたことだ。

『東槎録』⁽⁴⁾では、

十五日・・・(省略) 自店浦江口 右転至住吉前 幾数十里 毎年三月三日 則海乾成陸広可十余里 遠近男女 奔波来見 初四日以後海水漸至 国人伝為怪事 康朴両訳官曾所目見云・・・(省略)」(天啓四年十一月十五日)

住吉海岸の干潮について書かれている。この干潮を康遇聖は朝鮮通信使として渡日する以前に見ているため、捕虜として日本にいるときであったとわかる。

二十九日……(省略) 末時發行 過関原 即家康与輝元勝戦之地也 康遇聖曾於被擄時
在家康軍中 目見相戦之時云 ……(省略) (天啓四年十一月二十九日)

この上記によると、康遇聖が関ヶ原の戦いで家康軍にいたことがわかる。関ヶ原の戦いの頃、家康は伏見城に居たのだから、康遇聖も京都付近で軍中に入ったか、それ以前から仕えていたと考えられる。

『扶桑録』⁽⁵⁾ から明らかになることは、

二日……(省略) 有被擄人晋州居河魏宝之子河愷者. 為僧人. 来謁館下. ……(略) 訳官等
喜相逢. 細陳其父母消息. ……(省略) (万曆四十五年九月二日)

ここでの「訳官等」の一人は康遇聖であったことは、次の一週間後の日記によって記されている。

未時到淀浦止宿. ……(中略) 朝日康遇聖. 持一封書及硯封来示曰. 此乃晋州人河愷伝致其
兄者也. 大責其妄受. 盖惡其無歸意也.」(万曆四十五年九月八日)

河愷は捕虜として日本に来た時に康遇聖と一緒に過ごしたであろう人物の1人である。

このような記事は断片的で、10年間の康遇聖の居場所を確定することはできないが、主として京都・大阪あたりに住んだのではないかと推測できる。

慶長五年関ヶ原の戦いに従軍した康遇聖はその翌年に帰還している。『通文館志』⁽⁶⁾ の中の「通文館志卷之七 人物」の所で、康遇聖について述べた箇所がある。

康遇聖。晋州人。壬申被擄。十年乃還。熟暗倭俗。且善其語。嘗以国典所載倭語册子。語多疎略。乃設爲館倭接待信使酬酢之說。彙作十卷。名曰捷解新語。各様節目。無不詳備。康熙庚戌。陽坂鄭相国。啓請鑄字印布。自戊午後專以此書。行用於科試。出啓辭謄録凡再赴信使。五任釜山訓導。官至嘉善。

これによれば、「十年乃還」と記しているように、1601年の6月に捕虜送還があった。康遇聖もこの時帰還したと思われる。康遇聖が帰還した時、20歳になっていたと考えられる。11歳から日本で過ごした康遇聖は『通文館志』の記事からもわかるように、「熟暗倭俗。且善其語。」により、日本の風俗に通じ、言語が上達した1人であった。

1601年の捕虜送還について、『朝鮮史』⁽⁷⁾ の宣祖三十四年六月の記事にも見ることができる。

廿八日甲午対馬島の宗義智、柳川調信、豊臣正成寺沢正成、橘智正井出弥六左衛門ヲ遣シ、

書契ヲ齎シ、前県監南忠元及ビ本国被擄ノ男女二百五十名ヲ率キ釜山ニ来ル

上記により、1601年の捕虜送還の人数は250名程であったことがわかる。この時、『東槎録』で述べられている朴彦璜も帰還していることが『朝鮮史』によって明らかである。

八月 十七日壬午聖節望闕ノ禮ヲ行フ

京城ノ人朴彦璜、日本 玄蘇ノ所言ヲ言ヒテ日ク、ニホン累ネテ和セントスルニ、朝鮮、明ノ肯ゼザルニ托シテ和好ヲ欲セズ。明軍撤回ノ後、間ニ乗ジテ侵犯セバ、後悔及ブトコロ勿カラント。彦璜ハ壬申宣祖廿五年擄セラレテ日本ニ入り、是ニ至リテ南忠元ト俱ニ来ル。頗ル日本ノ国情ヲ識ルヲ以テ、特ニ上送セシム。

この南忠元の一に行に朴彦璜と康遇聖が加わって帰還したのではないかと思われる。

帰国した後、康遇聖は1609年の科举（倭学）に合格している。28歳で倭学に合格した康遇聖は釜山の司訳院で倭学訓導⁽⁸⁾を行う一方、光海君9年（1617年）・仁祖2年（1624年）・仁祖14年（1636年）に朝鮮通信使の訳官として来日している。1回目の行き先は京都、2回目と3回目は江戸まで来ている。⁽⁹⁾

康遇聖の没年は不明である。しかし、『邊例集要』⁽¹⁰⁾の訳官の章で、

壬申八月、府使尹文挙時、訓導康遇聖病重、方在死域、不能察任、当此多事之時、極為悶虚

とある。ここの壬申は1652年を指すことから、康遇聖の没年は1652年の8月からそう遠くはなかったと考えられる。

2. 『捷解新語』について

『捷解新語』の筆者は康遇聖である。『捷解新語』は康遇聖の生前に刊行されず、死後40年を経て1676年に刊行された。

『捷解新語』は出てからその後3回改修版が刊行された。1676年に『原刊活字本 捷解新語』、1748年に改修本（『改修捷解新語』）が作られ、1781年に改修本の改修本（『重刊改修捷解新語』）が作られた。『重刊改修捷解新語』を漢字仮名まじり文に改めた『捷解新語文釈』も作られた。『捷解新語』は日本語を本文とし、本文の右側にハングルで字訓が記してある。会話・暗唱・写字・語釈・翻訳・作文等、

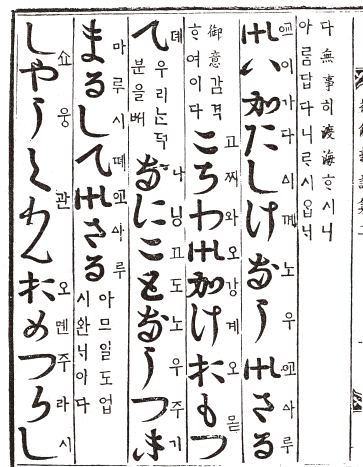


図1 『捷解新語』

多面的に修練をつむために使用された。1678年からは倭学の科挙には、前代使用されていた教科書をすべてやめ、『捷解新語』一書だけを専用することになった。

2.1. 『捷解新語』の構成

『捷解新語』の大きさは縦25.5cm、横15cmである。1ページ6行で構成されており、中央には教科書と巻数が書いてある。仮名には濁点・半濁点がなく、句読点もない。句読点の役目になっているのは、文の終わりにある訳である。訳はハングルで説明をしているが、時々、漢字も使用されている。又、同じ語句が反復して出る場合に、一方では漢字で、一方ではハングルで表していることもある。

また、巻1と巻10のみ、巻末に朝鮮人学習者には見られない単語が本文中の出現順序によって記載されている。(例 巻1巻末より、案内・亭主・迷惑、巻10の巻末より、左右・手前・見舞など)

『捷解新語』の構成は10巻から成り立っている。しかし、内容を見ると、一貫していない点がある。文体・内容から次のように分類した。

(I) 対話体で書かれたもの

- A. 釜山での日本と朝鮮の役人との会話(交渉)を内容としているもの
.....巻1・2・3・4・9(前半)
- B. 朝鮮通信使の日本訪問を内容にしているもの
.....巻5・6・7・8

(II) 対話体で書かれていないもの

- C. 日本の土地・地名の紹介巻9後半
- D. 候文体書簡文を取めたもの巻10

2.2. 『捷解新語』の分析

康遇聖は壬申の乱で日本に約10年間滞在していた。その時京都・大阪あたりにいたらしい形跡があったことから、『捷解新語』で使われていたことばは、関西ことばだと考えられる。『捷解新語』は、日本の役人と朝鮮の役人との会話形式で構成されている。この会話の中で使われている関西ことば、その他の特徴とする箇所を挙げていくことにする。

全文は仮名のみの表記によりわかりづらいので、漢字仮名交じり文にし、鉤括弧・句読点、促音をほどこした。

「これからそつと見ても知れまるする。その内にも一束にとる公木が十端あまり入ってあまりは一端もとる公木がござらん。この様な公木は、なんほう入れてもえとりまるするまい程に、はよもどさしられ。」

「さてさてあきれたおしらす様かな。五十束入れた公木を皆非を入れて、いかがめめそうと

心得さしらるか。いわんや、近年以來うちつづき木花悪しうて、公木の大切に成ったわ、おのおのもご存じであるんす。ことに、国々より、東蕨が時分をも考えず、公木をことごとしゅう、きつよるなどと、さたが専らの時、右のようにおっしゃって、果てもない所をあきれてとうもこうも申されんが、おのおのも時分と公木の値が常よりなんほう重なったを考えて、無事になるほんべつ（分別）がかんによう（肝要）でこそござれ。」

（巻4 P10.6行目）（下線、筆者。）

ここでは、「なんほう」が出てくる会話であるが、この「なんほう」について『全国方言辞典』⁽¹¹⁾では

なんぼー 副 何程。いくら。盛岡（御国通辞）・仙台（達用抄）。
なんぼ 庄内（浜荻）・大阪（浪花聞書）・殆ど全国

『上方ことば語源辞典』⁽¹²⁾では

なんぼ いくら。どんなに。いくつ。どれほどの値段。
（語源）ナニホドにや ナニホドから 鎌倉時代にナンボウとなり江戸時代十七世紀末にナンボとなった。

と記していることから、やはりなんほうは関西のことばということがわかる。また『上方ことば語源辞典』にあるように鎌倉時代からいわれるようになったのなら、康遇聖が日本に滞在していた時代とも一致することになる。関西ことばで、なんほう以外で見つけられるのは、打ち消しの「ん」である。

「おしらる所専らそうござるとあっても、この公木は、昔の公木に一束もによったがないを（似通ったが無いを）、おのおのの目にも見よずるに、呆れたなどおしらる所、なにとも不審にこそござる。こなたのおしられかけと、こちのそうぶん（存分）とその違い天地の如くなが、このぶんではすままい程にこの公木を端端によるか、それを厭とこそ思し召せば、もといて改めて入れさしらるか、早速きわめんえば、飛船のはずにあわん程に、きも入らしられ。」

（巻4 P13.2行目）（下線、筆者。）

「申すまいことなれども前規におうした事ぢゃ程に、判事しゅうよう聞かしられ。高麗餅もひく積みまるする。乾し物もふたいろ（二色）少ない、かいご（卵）も一つなし、皿も数の内の一つを除けた程に、忘れてこうか、こちを知るんかと思うて、わざとこうしまるするか。」

（巻2 P9.4行目）（下線、筆者。）

「さてはこの様子は知らいんで、御むかいなれば、あまり早よござったと存じまるししたに、おしらる言葉を聞けば、急がいんでかなわん事じゃ程に、大方にさしられんように東

羨へ申して、飛脚をたつる様にしまるせう。早よ書契を出さしられ」

(巻5 P4.10行目) (下線、筆者。)

ここでは、打消しの表現で、「ん」が出てくる。これも関西のことばである。

関西のことば「ん」の打ち消し表現は『捷解新語』の中で多くみられる。康遇聖の日本語習得は捕虜時代、耳からの学習だったと考えられ、耳から聞くことばをそのまま表記したのであろう。また、ロドリゲスは『日本語小文典』⁽¹³⁾で、「日本語の学習と教授にふさわしいと思われる方法について」言及している。

日本語を学びこれに熟達する方法には主なものが2つある。その1つはこの地の人びとと日常的に交際してこのことばを用い、人びとがさまざまな事柄について話す時の種々の表現・言葉遣いにおこたりにくく注意を払い、自然にこれを習得する方法である。この場合、比較的平易な文字は、たとえ正確に書くことができなくとも、読みかたは覚えるべきである。なぜならば文字の学習は、このことばを深く知るためにも、語の構造、正しい発音、日本語の優美・高雅な面を知るためにも非常に有効な手段だからで、こうしたものはすべて文字の中にもっているのである。

森田(1951)も、『捷解新語』に記された国語は九州方言の影響も認めるが、総体的には京都付近の常時の口頭語であると示している。そして、『捷解新語』は京都語の資料たる価値を認めてもよいとも述べている。

また、関西のことばとは考えにくい言葉が『捷解新語』にいくつか出てくる。

いつときくつるがしられて 御ざろうならば われら こしもとの わかい ものどもお
おどりおさせて 御めに かけたうこっそ御ざれ これも いわうての こととこっそ
申まるする (巻6 P6.7行目) (下線、筆者。)

『日本方言大辞典』⁽¹⁴⁾では

こしもと 【腰元】

①人のそば。ひざ元。青森県津軽「なんぼねなても、おやのこしもどがらはなえなえ(いくつになっても親のひざもとから離れ得ない)新潟県佐渡 奈良県宇智郡

【文献例】 狂言・鼻取相撲「おこしもとにてつかわせられうずるには、一段の者でござる」

②婚礼の時に花嫁に同伴する女。新潟県 鳥取県西伯郡 広島県山県郡 長崎県対馬

③いろいろ端の主婦の座。宮城伊具郡 茨城県多賀郡 栃木県大田原市・河内郡 神奈川
県津久井郡 長野県((こしもとざ〔一座])) 山梨県東八代郡((こしもん)) 福井県大野

郡（こしねざ） 島根県上隠岐島

④いろいろ端の嫁の座。長野県上伊那郡

⑤勝手。台所。長野県

『改修捷解新語』では「こしもと」を「めしつかい」と記載している。『捷解新語』でもめしつかいの意味で記したのならば、①か②の意味が近いと思われる。また、②では「こしもと」を対馬方言として使用していたことがわかる。『捷解新語』が教科書になる前に康遇聖は朝鮮通信使として来日していることから、対馬方言の影響を少なからず受けたのかもしれない。

また、『捷解新語』の原文とハングルの音化表記が一致しない箇所がある。

「たこくの ことと おほしなく つくづく あちても 御らんじられ そさわかさなり
このように」
（『捷解新語』巻4 P23. 11行目）（下線、筆者。）

「われら やつくりおも うちまわって 御らんじられて ばんかたにも もどらしらる
ように のぞみでこっそ御ざれ」
（『捷解新語』巻6 P4. 9行目）（下線、筆者。）

上記の文は、原文では「ごらんじられ」と表記されているがハングルの音価表記は「고론시라레」（ゴロンジラレ）と記してある。上記2箇所以外の「御らんじられ」でも同様か探した。

「そう しまるせうが ふかう いるまるしたほどに べちの ことも 御ざらんほどに
あす 御らんじられ」
（『捷解新語』巻1 P16. 3行目）（下線、二重線、筆者。）

上記の巻1でも、「御らんじられ」の「ら」のみ、ハングルの音価表記は「ㄹ」（ロ）と記載されている。しかし、二重線の「御ざらん」の「ら」は原文と同様「ㄹ」（ラ）と音価表記されている。また他の箇所の原文が「ら」の場合、ハングルの音価表記も「ㄹ」（ラ）と記されている。原文と音価表記の違いは巻1から巻10の中で3箇所見られる。これは『捷解新語』の日本語表記がくずし字のため、誤って「ら」を「ろ」と取ってしまったと考えられる。「御らんじられ」（ゴロンジラレ）は『捷解新語』だけに見られ、『改修捷解新語』では見られない。

3. 『改修捷解新語』について

1748年、崔鶴齡によって改訂された。全10巻から構成され、『捷解新語』は1ページ6行なのに対し、『改修捷解新語』は1ページ4行で構成されている。句の区切りに「○」が表示されている。会話形式で構成されている。「主」は朝鮮の役人、「客」は日本の役人を表し、本文欄外に頭書きしてあるため、誰のことばかわかりやすくなっている。

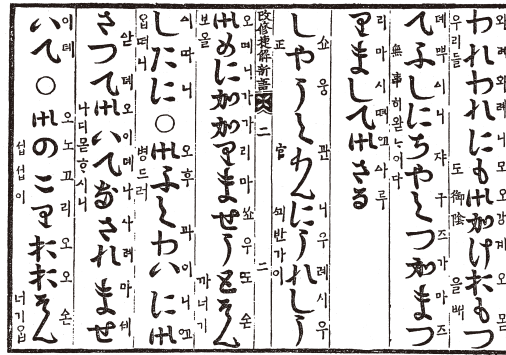


図2 『改修捷解新語』

3. 1. 『捷解新語』と『改修捷解新語』の比較

『捷解新語』が刊行されたのは1676年のため、72年の月日が流れている。そのため、『改修捷解新語』に出てくる日本語に若干の変化がみられる。以下の文は『捷解新語』と『改修捷解新語』からの抜粋である。下線で見られる変化を「1」に、二重線で見られる変化を「2」に記した。

「御めにかかろんお、いかうかなしおぞんじまるして、病がなお重るかとおもいまるする。」
 (『捷解新語』巻2 P5. 2行目) (下線、筆者。)

「御めにかからずことお、かなしうおもうて○やまいが重いませうとぞんじまるする。」
 (『改修捷解新語』巻2 P7. 3行目) (下線、筆者。)

3. 1. 1 打消し表現の変化

打消し表現の変化が見られる個所に下線を引いた。『捷解新語』では「御めにかかろん」と表記してあり、2-(2)でも上述したが、関西のことばと考えられる打消しの「ん」が記されている。しかし、『改修捷解新語』では「御めにかからず」と変化していることがわかる。上記に記した巻2以外の箇所にも変化は見られる。

A

「ふねの どうぐも そろわんて おくれまるしたほどに それできづかひまるする」
 (『捷解新語』巻1 P13. 9行目) (下線、筆者。)

A'

「ふねに どうぐも そろわずして おくれましたたて御ぞろうほとに○それゆゑ きつかひに そんじまつする」
 (『改修捷解新語』巻1 P19. 4行目) (下線、筆者。)

また、『改修捷解新語』で使用されていた打ち消し表現は「ず」だけではなく「ぬ」も使用していたことがわかる。

B

「そっちもこっちもとうぜんてこっそ御ざる こっちも そのやうすわしらんてもなければども めいわくさおたれに申まるせうかそう しまるせう」

(『捷解新語』巻4 P29. 4行目)(下線、筆者。)

B'

「そっちもこっちも とうぜんて御ざる このはうもそのやうすおしらぬても御ざらぬとも めいわくさおたれに申ませうか さやうにいたしまっせう」

(『改修捷解新語』巻4 P41. 2行目)(下線、筆者。)

C

「またわ あいらしき こともしゆの おどりの やうと うたのころもちわ しらんゑども」

(『捷解新語』巻6 P8. 9行目)(下線、筆者。)

C'

「またわ あいらしき こともらちの○おどりやうと うたのころわ しりませぬとも」

(『改修捷解新語』巻6 P12. 3行目)(下線、筆者。)

3.1.2 ハングル注記の変化

『捷解新語』の原文、「やまいがなお重るかとおもいまるする」の後の注記では、「病」の記載を確認することができる。しかし、『改修捷解新語』では「やまいが重いませうとぞんじまする」の二重線「やまい」の横には、「兕」(病氣・病)とハングルで訳が表示されている。これについて朴(2003)は『捷解新語』と『改修捷解新語』と『重刊捷解新語』に出てくる体言・用言・修飾語等の実質的な成分に限り語種の変化がみられる例だけを対象とし調べ、以下のよう示している。

漢語化の場合、改訂を重ねるほど漢語が増加していくことが分かる。この時、一旦漢語に改訂された単語は、重刊本まで維持される傾向が強い。また固有語化の場合、漢語化の例に比べ、その出現数が少ない。が、原文の固有語化の例に該当する対訳文はハングルで現れている場合がほとんどであった。このように、対訳文の語種は、原文の語種に干渉を受けていることが看取できる。⁽¹⁵⁾

また、『捷解新語』は『改修捷解新語』に比べ注記で記述された漢字の語彙数が少ない。2-(2)でも上述したが、康遇聖が日本語を耳から覚えたことが理由だったと推察する。

3.1.3 丁寧さ

『捷解新語』と『改修捷解新語』を比較すると、語彙の変化の中で丁寧さに大きな変化がある。

A

「東葉 おしらるわ わたる ひわ おりふし わるい かぜに みな無事に 渡海さし
られて めでたいと おしりまるする」 (『捷解新語』巻2 P1.2行目)

A'

「東葉 おつしやれまっするわ○御渡海の ひわ おりふし かぜも わるう御ざつたれ
とも○みな 御無事に 御渡海なされまして ちんちやうに ぞんじまっする」
(『改修捷解新語』巻2 P1.22行目)

B

「われら むてうはうに なるわ めのまゑちやと いろいろ申すほとに たとゑ あが
らしらるが 御たい ぎに 御ざるともあれらが ざうさお」
(『捷解新語』巻6 P18.8行目)

B'

「われら むてうはうに なりまっするわ めのまゑちやよと いろいろ申すほとに○た
とゑ 御あがりなされかとう 御ざるとも○かのひとなどの ざうさお」
(『改修捷解新語』巻6 P26.8行目)

C

「三奉行が きのうの 御礼とあつて 対馬のかみおもつて申すことわ きのうわ 対面
にて たがいに ことばお あわせ めでたさ礼にあまつてこっそ御ざれ」
(『捷解新語』巻7 P22.4行目)

C'

「三奉行が さくじつつの 御礼と申して○対馬のかみおもつて 申しあげらるるわ○き
のうわ 御あいくたされまして○御たがいに 御はなしお いたしまして ありがたう
ぞんじまする」 (『改修捷解新語』巻7 P33.2行目)

それぞれ2つの文は全く同じ箇所からの抜粋である。『改修捷解新語』では丁寧な表現が増えていることがわかる。上記の箇所以外でも、『捷解新語』では「ちつと」と表記されているところが、『改修捷解新語』では「少し」と表記されているなど、多くの箇所でこのような単語の変化がある。このような現象を『捷解新語』と『改修捷解新語』を細かく調査することでそれぞれの特色がさらに明確になると考える。また、森田(1955)は『捷解新語』に記された日本語は比較的下層の俗な言い方と示すものであるとしている。

4. おわりに

『捷解新語』の著書である康遇聖についての研究は少なく不明なことが多い。しかし、『捷解新語』に関する研究は多く、日本語の語彙、文法、ハングルなど多方面においてみられる。今回は打ち消しの表現変化、ハングル注記の変化、丁寧さの3項目から『捷解新語』と『改修捷解新語』を比較した。今後の課題としては、『捷解新語』と『改修捷解新語』をさらに比較考察することで、『捷解新語』の特質を深く、より明確にする努力を続けたい。さらに、『捷解新語』を作成した目的や狙いなど明確にできるよう研究を続けたい。

【注記】

- (1) 民昌文化社『訳化榜目』（1994）
- (2) 松田毅一・川崎桃太 訳『フロイス 日本史2』中央公論社（1977）P304 5行目～12行目
- (3) 辛基秀・中尾宏『善隣と友好の記録 大系朝鮮通信使 第五卷 己亥・享保度』明石書店（1995）
- (4) 辛基秀・中尾宏『善隣と友好の記録 大系朝鮮通信使 第一卷 丁未・慶長度 丁巳・元和度 甲子・寛永度』明石書店（1996）
- (5) 朝鮮古書刊行会編『朝鮮群書大系 海行総載』（1914）
- (6) 朝鮮古書刊行会編 朝鮮古書刊行会『朝鮮群書大系 続十七輯 通文館志全』大正2.4.16（P169 4行目～7行目）
- (7) 朝鮮総督府『朝鮮史 第四編 第十卷』朝鮮印刷株式会社（1937）（P938 3行目～5行目）
- (8) 司訳院で日本語を教える教師のこと
- (9) 李元植『朝鮮通信使の研究』思文閣出版（1997）
한국 일어일문학과 『일어일문학 연구』鄭章植「通信使와 朝鮮의 対応」
한국어일문학과（2000）
- (10) 大韓民国文教部国史編纂委員会『韓国史料叢書 邊例集要 第16巻』探究堂1971.3
- (11) 東篠操『全国方言辞典』東京堂出版（1953）
- (12) 堀井令以知『上方ことば語源辞典』東京堂出版（1999）
- (13) ロドリゲス著 池上岑夫訳（1993）『日本語小文典』岩波文庫（1993）
- (14) 尚学図書『日本方言大辞典』小学館（1989）
- (15) 京都大学国文学論叢10『捷解新語の語彙改訂の方向性：語種改訂を中心に』朴真完（2003）

【参考文献】

1. 森田武（1952）「捷解新語の国語について－その資料性の考察」『国文学攷』広島大学国語国文学会
2. 森田武（1955）「『捷解新語』成立の時期について」『国語・国文第24（3）』中央図書出版社
3. 林義雄（2006）『四文和文対照 捷解新語』専修大学出版局
4. 大友 信一（1957）「『捷解新語』の成立時期私見」『文芸研究 26』日本文芸研究会
5. 亀井 孝（1958）「『捷解新語』小考」『一橋論叢 39（1）』一橋大学
6. 青山秀夫（1954）「捷解新語に見える敬語法の特徴」『天理大学学报10（3）』天理大学学術研究会
7. 伊奈恒一（1965）「捷解新語に現れた敬語について」『語文（21）』日本大学国文学会
8. 辻星児（1982）「改修捷解新語の朝鮮語について」『岡山大学文学部紀要（3）』岡山大学文学部
9. 滝山政太郎著（1977）『対馬南部方言集』柳田国男編 国書刊行会
10. 鄭光（1990）『原刊活字本 捷解新語』弘文

11. 安田章・鄭光（1991）『改修捷解新語』大学社
12. 児玉幸多（1993）『くずし字解読辞典』東京堂出版
13. 太田尚宏・保垣孝幸・中村大介（2000）『古文書解読辞典 文書館へいこう くずし字の特徴とくずし方の事例で検索』東京堂出版

【追記】

本稿は、平成15年度目白大学大学院国際交流研究科言語文化交流専攻修士論文『朝鮮・司訳院時代における日本語教科書についての一考察 『捷解新語』を中心に』の一部に加筆補正したものです。

（平成23年11月9日受理）